

海獣葡萄鏡

今年の秋の特別展では海獣葡萄鏡に焦点を当てた展覧会を企画しました。海獣葡萄鏡は高松塚古墳の副葬品として有名になりました。丸い形をした青銅製の鑄造品で、表は磨き上げてあり、裏には中央のつまみである、鈕を中心に海獣と呼ばれるライオンに似た獣が様々な姿態で表現されます。裏側の文様を内と外に二分割する界線と呼ばれる円形の突線の外側には、昆虫や鳥を配しています。これらの動物や昆虫の周囲を葡萄の蔓草や房が取り囲みます。

高松塚出土品と同じ文様の海獣葡萄鏡が、西安近郊の墓から698年の紀年を持つ墓誌とともに出土しており、海獣葡萄鏡の時代を知ることができると同時に、高松塚古墳の年代と被葬者の比定に大きな手がかりとなりました。

日本では高松塚古墳以降、いくつかの火葬墓から副葬品としての出土が知られます。また直径6cmほどの小形海獣葡萄鏡が奈良時代に大量に生産され、溝や川などから発見されています。また多くの海獣葡萄鏡で同型鏡が見つかっており、その生産と流通のあり方にも興味を持たれます。鏡の直径は16.8cm。
(飛鳥資料館 杉山洋)

